田嶋智太郎の FX レポート☆彡　　２０２４年０２月２２日更新分

■　そろそろ円売りの流れもピークアウトへ！？

本日（２２日）の日本時間早朝、米半導体大手エヌビディアの２３年１１月―２３年１月決算が発表され、事前予想を上回る好結果を受けて市場は時間外で同社株を買い上がる反応を見せた。

発表前の市場では「好結果は事前にかなり織り込まれており、目先の材料出尽くしで同社株は一旦売られる可能性がある」との声が数多く聞かれ、そうなれば日本株も調整含みとなり、連れてドル／円も弱含みの展開になりやすいと見る向きが少なくなかった。

実際、昨日のＮＹ市場でエヌビディア株は続落となり、同時に一部で“エヌビディア指数”などと揶揄されている日経平均株価も上値の重さが感じられる展開を続けていた。なかでも、半導体関連株は全般に週明けから調整含みとなっていたわけで、それだけに今回のエヌビディアの予想を上回る好決算と、それを受けて時間外で示された市場の強い買い意欲は、一部にあった事前の懸念や目先の弱気予想を一気に吹き飛ばすに十分なものであったと言える。

結果、本日の東京市場は寄り付き段階から半導体関連株を中心として全体に大幅高の様相を呈しており、連れてドル／円、クロス円はともに強気ムードに包まれている。既知のとおり、海外投資家は日本株を買う際、同時に円の先物売りを仕掛るケースが少なくないとされ、ゆえに日本株が上値追いの展開になると、連鎖的に円を売っておこうという動きも強まりやすくなる。

端的に言えば、足元は米国株高が日本株高に波及し、それが円売りを呼ぶ。兎にも角にも目下は円売りの流れが非常に強く、一方で対ユーロでのドルは昨日まで６日続落。それでもドル／円が高止まりしているということは、言わば「円全面安」の状態にあるということである。

前回も述べたように、日銀による政策判断のカギを握る春季労使交渉の集中回答日まで、残された時間はもはや１カ月足らずとなってきた。幾つかの個別企業や一部の業界からは、かなり“威勢のいい”声が聞こえてくることも事実で、今回の労使交渉の結果は市場のムードを一変させるものになり得ると個人的には考える。

昨日、内閣府から２月の月例経済報告が公表され、３カ月ぶりに景気判断を下方修正したことが明らかになった。個人消費の停滞が主要因で、その背景には物価高の影響がある。もちろん、それ自体は円売り要因となり得るわけだが、今後、想定以上の賃上げが実施されるとなれば状況はだいぶ異なってくる。その実、今回の景気判断について新藤経済再生担当相は「所得環境が改善する中で、消費は一時的な足踏みから持ち直しに向かうことが期待できる」と述べていた。つまり、そう遠くない将来において円の買い戻しが強まる（円売りの流れがピークアウトする）可能性は十分にあるということである。

また、左図に見る通り、ユーロ／ドルが８９日移動平均線（８９日線）をクリアに上抜けて、一段の上値を試す可能性もないではない。既に、２１日移動平均線（２１日線）を明確に上抜けていることからして、想定していた以上の強さが感じられることも否定はできない。

差し当たっては、本日の欧州時間に発表される２月のユーロ圏製造業ＰＭＩや１月のユーロ圏消費者物価指数（ＨＩＣＰ）の結果に加え、１月２５日開催分の欧州中央銀行（ＥＣＢ）理事会議事要旨の内容などをしっかり確認し、それらに対する市場の反応を見定めたい。

（０２月２２日　１０：１５）